



テレジンを語る会いばらき おたより

モティール

No. 06 2013.5発行

<http://teresien.ibaraki.jimdo.com/> *モティール・・・チェコ語で蝶

テレジンの子どもたちから *****

5月になりました。準備期間を含めると真冬の寒さから初夏の汗ばむ季節まで、テレジンの子どもたちとずっと過ごしたような半年間でした。さあ、8日からつくば市民ギャラリーでの展示が始まります。

3月4月の連続講座の際、林さんがVEDEMの資料としてお持ちになった本が数冊あります。その中の1冊に目が離せなくなりました。

「TEREZIN」という1988年発行のチェコ語の大型本で、かなり痛んでいます。表紙からしてタイトルの文字が「テレジーン!」と叫んでいるようです。崩れかけたレンガ塀の向こうの空に鳥が2羽見える。裏表紙は家の塀に蝶々の落書き。ページをめくると「MOTYL」という詩。チェコ語はわからないけれど書いた子の名前はわかります。パヴェル・フリードマン、ああ知っている!「蝶々」という詩だ。記

録写真集ではあるけれど、この本の装丁デザインがすてきです。ページをめくるたびにどきどきします。中ほどに女の子と男の子が手をつないで野原を歩いているクレヨンの絵があります。Gabiという11歳でアウシュヴィッツで殺された子どもの絵です。ここには「ZHRADA」という詩、名前はフランティセック・バス。ああ、「庭」だ。

一昨年の展覧会の前に子どもたちの詩の朗読会を行なった時の「十里舎お話でんでん」の方たちによる朗読がよみがえります。ギンズ君の詩「プラハの思い出」は汚い瓦礫だらけの部屋の写真と共にありました。美しいプラハの思い出をうたっているながら「醜い穴」にいる今の自分の状況なのかなあ……

チェコ語は全くわからなくても、この文字がどんなに切ない気持ち

を表現しているのかと思うと日本語に訳されたものと同じように涙が出てきました。読めない文字をこんなに愛おしく想ったことはありませんでした。

そして今日という日に唱えます。『政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないように』(日本国憲法前文より)することを決意したのは、ホロコーストによって肉体的にも精神的にも破壊されつくしたヨーロッパの人々だけではなく「日本国憲法」を制定した私たち日本人であることを。

2013年5月3日



- ◆5月8日～12日パネル展
- 「生きのびた少年ジョージの物語」
- 「プラハ・テレジン・アウシュヴィッツ」パネル展
- 8日(水) 正午～午後5時
- 9日(木)～11日(土) 午前9時30分～午後5時
- 12日(日) 午前9時30分～午後3時30分
- 会場：中央公園内つくば市民ギャラリー (つくば市吾妻2-7-5)

- ◆5月11日(土) 連続講座第三回
- 午後2時～4時
- 市民ギャラリー内でお話し会
- 講師：石岡史子さん
- 生きるための優しさと強さを育む
- ～「ハンナのかばん」と
- 収容所を生きぬいた少年ジョージの物語～

資料提供：NPO 法人ホロコースト教育資料センター (kokoro)、石岡史子、林幸子、新評論、ポプラ社、平凡社
主催：テレジンを語る会いばらき 問：TEL/FAX 029-823-3484 (関谷)



第1回 3月17日

講師: 林 幸子さん

「テレジンの子どもたちから」—ナチスに隠れて強制収容所でがんばった子どもたち—

講演会に参加して

阿部 きよ子

林さんは、チェコを訪れたとき、テレジン収容所で子どもたちが出していた雑誌「VEDEM」を知り、どうしても読みたいと、コピーを入手し、合計800ページにもなるこの雑誌の主な部分を本にまとめられました。

1942年12月、テレジン収容所「男の子の家」1号室の子どもたちは自治会を結成し、1944年6月ごろまで、毎週金曜に「VEDEM」が発行されました。林さんが朗読くださった内容で、まず、印象深かったのは第1号の自治会発足宣言です。

「僕たちは、これまでの文化の基盤を取り上げられても、さらに新しい文化を作ります。…憎しみや数多くの悪意によって一般の人間社会から引き裂かれた僕たちは、自分の心を憎しみや悪意で固めたりはしません。…」

悲惨な日々をおくっていた子どもたちの、凜としたこの宣言には、身が引き締まる思いがします。F A君の「がんばる」という題の詩も印象に残りました。

「…ああ、できることならこのまま消えてしまいたい…見えないものが僕にささやく『勇気を出して、こんなことがいつまでも続くはずはないから』と…僕の中に

はむなしさばかり…でも、僕はがんばる!自分のもの、自分自身を見つけるまで…」。

彼らは、自分を見つめ、表現する中で前向きに生きようとしていたのだと思います。

テレジン収容所で、大人たちは、自らも絶望的な環境にありながら、子どもたちの成長を願い、希望を与えようと、努力していました。絵を指導したフリードル先生、男の子の家1号室担任のアイシングル先生。プリンジバルというミュージカルを作って子どもたちに上演させた作曲家、指導者たち。アウシュビッツのガス室で殺された人たちが大部分ですが、人間としていきぬいた大人たちと、彼らに支えながら、成長し続けた子どもたちの姿から学ぶことはとても大きいと思います。

私はベトナムのストリートチルドランを育てる「子どもの家」を作り運営していた、小山道夫さんから以前聞いた話を思い出しました。路上で暮らす子どもたちに衣食住を保障しても、逃げ出してしまうことが多かった。文化的な教育活動をして始めて、子どもたちはおちついて希望を持って暮らすようになった。というのです。年齢に関わらず、考え、感じ、自分

を表現するという創造的な活動は、人が人であるために欠かせないのだと思います。人として生きるために、テレジンの子どもと大人は力を尽くしました。

昨日、テレビで、好きな遊びについての子どもへのアンケート結果が紹介されていました。男女とも、一番やりたいのがゲームで、他はカード集め、サッカーなど、自分で工夫する遊びがまるでありません。学校では、というと、行事は減らされ、劇は、国語の授業でやっただけ、学芸会もない、という話です。中学では、芸術科目は極端に減らされ音楽、美術は、2、3年では週に1時間ずつしかありません。児童会、生徒会も、行事での先生の手伝いがほとんどで自治的な要素が失われているのが現状です。この春、全国一斉学力テストが実施さ、その点数アップの対策にあちこちの学校で、なみなみならぬ「努力」が行われたことが報じられました。点数競争に駆り立てられた学校が、子どもたちの自治能力や創造性をさらに奪う教育に邁進することが案じられます。

この日の講演を聞いて、今の日本に生きる私達が子どもたちに、何をしなければならないか、真剣に考え、行動しなければならないと痛感しました。



第2回 4月13日

講師: 林 幸子さん

「テレジンの子もたちのその後」一戦後子どもたちはどう生きたかー
ホロコーストの悲劇を再び起こさないために 森 澄子

4月13日、土浦一高旧本館復元教室での「林 幸子さん第2回講演会」に参加した。歴史ある学舎、高い天井まで開かれた窓から注ぐ光の中、平和を語る講座が行われた。

ナチスのテレジン・ユダヤ人強制収容所からアウシュビッツ絶滅収容所へ1万5千人の子どもたちが輸送され、生き残ったのは100人という。テレジン「L417」1号室で、雑誌「VEDEM」を発行していた子どもたち。編集長であり大活躍だったギンツ君もガス室で殺され、指導者のアイシングル先生もアウシュビッツで亡くなった。ペpek君も高圧線鉄条網に自ら走って亡くなった。

生き残った子どもたちの手で「VEDEM」は日の目をみる。コトウチュさんはズデネクさんと「VEDEM」の英語版も出版した。奇跡的に生き残った少年たちも帰った家は他人のものとなっていたり、肉親やまわりの人々の死や絶望に直面してどんな思いだったろうか。いつも「なぜ私だけが残ったのか?」と自分を責めながら生きてきたという。カナダ、アメリカ、イスラエルへと移住した方も多い。計り知れない悲惨さ辛さを乗り越えて、新しい地でもしっかりと根を張り家族を育て強く明るくそれぞれの人生を歩んでこられた。そしてコトウチュさんのように「大切な仲間の記憶を残すこと、自分の経験を忘れないで伝え

ることが使命」と行動されておられる方がいらっしゃる。ホロコーストの悲劇を再び起こさないために、強い意志と深い愛のもと実践されながら現代を生きておられる。「VEDEM」の紹介とともにそのことを教えていただき林さんに深謝の思いです。

質疑応答で「多様性 (diversity) : 障がい者、外国人、男女差等の差を知った上で相手を切り捨てない、他者への想像をする力の大切さ」を話された方がおられたが全くの同感で、参加された皆様が悲惨な戦争を回避する道を考えておられるのが伝わってきて嬉しかった。

僕たちの自治会の発足宣言 1942年12月18日 男の子の家1号室「シュキド共和国」 ヴェデムより

旗は高く揚がりました。1号室は、自分たちの旗をもっています。それは、将来の仕事や未来の共存のシンボルです。

また、僕たちの1号室は自治会をもっています。どうして、それをつくったのでしょうか。僕たちは。単に、押し付けられた運命を、苦しみながら生きるために集まっただけのグループでいたくないからです。僕たちは、友人と仕事と規律との間で、意識をもった活動的な組織をつくりたいと思っており、自分たちの運命を楽しい意味のある現実に変えたいのです。

僕たちは、僕たちの若さが映え、育つはずだった土壌や、仕事、喜び、文化を、不当に取り上げられています。彼ら(ファシスト)は、一つの目標をもっています。それは、僕たちを肉体的ではなくて、精神的、道徳的に破滅させることです。

彼らは、それに成功するでしょうか?いいえ、決して成功しないはずです。

僕たちは、これまでの文化の基盤をとりあげられても、さらに新しい文化をつくります。かつての喜びの原点から引き離されても、新しい、もっと楽しく、もっともっと輝かしく歌える生活を作ります。

僕たちは、整理された、きちんとした集団としての共存生活から隔離されても、組織された秩序や規律や相互信頼の下に自分たちの新しい社会をつくります。憎しみや、数多くの悪意によって一般の人間社会から引き裂かれた僕たちは、自分の心を憎しみや悪意で固めたりはしません。

隣人への愛と、人種差別、宗教差別、民族差別への反対が、現在も将来も、僕たちのまず最初の法律になります!

「生きのびた少年ジョージの物語」 「プラハ・テレジン・アウシュビッツ」パネル展

◆5月8日～12日
会場：中央公園内つくば市民ギャラリー

チェコ生まれの少年ジョージは、16才でアウシュビッツに送られました。両親も妹も失い、家族でただ一人、奇跡的に生きのびました。

16才の少年がいかにしてアウシュビッツを生きぬいたのか。ご本人の証言や、2005年にチェコの街角で偶然発見されたジョージの日記を紹介します。そこには、幸せだった故郷での日々や、家族の温かさを心の支えにして一人の少年が決してあきらめなかった姿があります。妹を守ることを決意し、収容所の仲間たちと助け合い、「秘密の学校」で学びあっていた姿があります。

自由のない、劣悪な環境の中で、大人たちは子どもたちを守り、学ぶ機会を与えていたのです。この展示では、子どもたちが共に学び、助け合いながら 過ごした日々を、当時16才のジョージ・ブレイディの言葉で紹介します。

1929年、チェコスロバキア(当時)生まれ。児童書『ハンナのかばん』の主人公ハンナのお兄さんです。1942年、妹と共にテレジンへ送られました。44年、アウシュビッツへ送られ、家族で ただ一人生きのびます。戦後、テレジンで同じ部屋の少年たちが密かに発行していた新聞「ベデム」(ぼくらがリーダーだ)の出版に尽力。仲間の思い出を今も語りついでいます。

現代の子どもたちに育んでほしい「生きる力」を、一人の少年の姿をとおして、ぜひご覧ください。

石岡史子 NPO法人ホロスコート教育資料センター(kokoro)代表

テレジンとは？

ホロコースト(ナチスによるユダヤ人虐殺 1933-45年)の時代につくられたゲットー(ユダヤ人強制居住区域)および強制収容所(ドイツ語名はテレージエンシュタット)。チェコスロバキア(当時)、プラハの北60 kmに位置します。西ヨーロッパから移送されてきた著名なユダヤ人画家、作家、音楽家たちが豊かな文化を形成していました。しかし実態は、ナチスがユダヤ人迫害を対外的に隠すために、プロパガンダに利用した場所でした。テレジンに送られてきた14万人のユダヤ人のうち、約3万人がテレジンで亡くなり、約9万人がアウシュビッツなどの東の絶滅収容所へ送られました。



『ハンナのかばん』
(2002年、ポプラ社)

特別参加作品

パネル展「テレジンの子どもたちから」に、皆川末子さんから布絵を2点参加していただきました。

平和への想いを布絵にこめて
皆川末子

国際交流のひとつとして、2001年、チェコ・プラハで布絵展を開催しました。その際、ユダヤ人共同墓地を訪ねました。多くの子どもたちや女性が犠牲者となったところです。身体の中ずっと奥の方で大きな衝撃を受けたのです。初めての体験でした。こんなに身震いしたのは。そして突然、頭のパレットから色が消えたのです。私で出来ること、私が出来ること、私だから出来ること。

布絵を通して“NO WAR”!